

透析医のひとりごと

「透析医療を振り返って

——思い出，そして感じていること——

寺尾尚民

私が透析医療に携わる機会を得たのは、1968年頃だったと思う。今から約46年前なので、ほぼ半世紀近くが過ぎた事になる。その過程の中での忘れられない思い出、そして感じていることについて述べてみたいと思う。

まず、思い出としては、日本透析医会設立に至る経緯である。その件については、太田和宏先生が簡潔に経緯を書かれている（日透医誌，26（1）：167-169，2011）。愛知県透析医会が呼び掛け、各県に透析医会を設立、都道府県連合会を設立した。その時、私は四国代表として参加していたが、以後、透析医会へと引き継がれ社団法人へと発展するまで関わりを持つことができた。この透析医会が設立していなければ、今日の日本の透析医療経済はかなり厳しい状態に陥っていたのではないかと考えられる。

その設立の過程において、まず、その必要性を唱え、産声をあげたのが愛知県透析医会であったこと、そして全国に呼びかけ、都道府県連合会を設立するに至らせた功績は絶大であり、その先見の明に加え、団結力と実行力には心から敬意を表するものである。そして、その後、透析医会設立にさいして全国より応募して集まった基金2億円を厚生省から返還の指導があったようだが、それに対して役員間で議論が沸騰した。私は返還には断固反対であった。その反対の主旨は、一旦、全国の透析医療機関から賛同して集められた募金を返還することは、皆さんの期待を裏切るものとなり、今後、同様の働きかけを行っても賛同していただくには、かなり困難を極めるのではないかと考えたからである。以後、執行部の方々の判断に加え厚生省の理解も得て返還は据え置きされ、結果、日本透析医会が設立されるに至ったと考えている。

その後、かなりの年月を経て公益社団法人へと発展し、常に厚生労働省とコミュニケーションをとり、透析医療の実態、必要性を訴え続け、日本透析医療経済を支える屋台骨となって今日に至っている。また、昨今では災害ネットワークも構築され、社会的貢献度も高く評価されているところである。これらの意味で、現在の透析医会の果たす役目は大変重要かつ不可欠な存在である事を重ねて強調したい。

二つ目に、40数年の私の透析医療歴を振り返ってみた時に、最近特に感じている事がある。初期は貧血や骨症等の問題が山積していた。しかし、現在、浄化法の発展と共に、これらの部分はかなり軽減できる状況になりつつある。しかし、dialysis related amyloidosis (DRA) や MIA 症候群等との関連も指摘されてきている状況もある。

最近まで、透析回診を行っていたが、その中で感じていた事は、血中 β_2 -MG の高値群がかなり減少してきた事である。確かに、種々の浄化法の進歩による影響があると思うが、特に感じている事は水の清浄化が

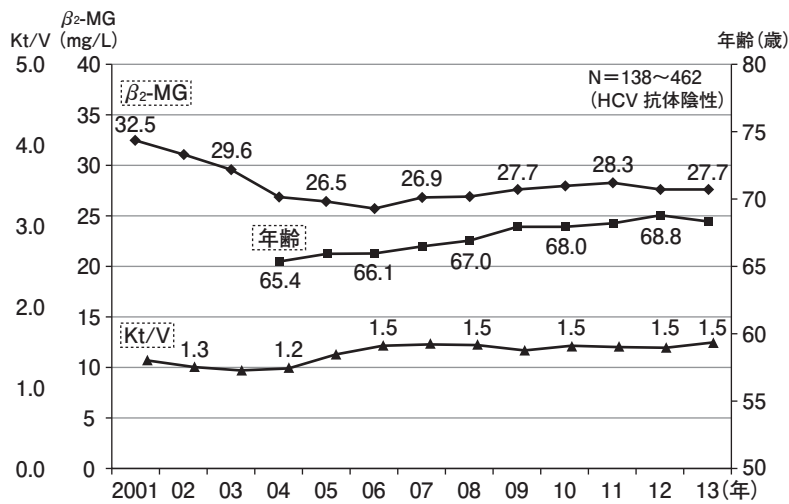


図1 血液透析患者血中β₂-MGの年次の推移

最も大きな要素ではないか、という点である。その有力とも考えられる根拠の一端をご披露したいと思う。

清浄化の当初の取り組みは、透析後の発熱の原因が透析液中の細菌によるものとの考えから、配管等の洗浄法の検討が始まった。その延長線上で細菌およびエンドトキシンのチェックがなされるようになり、本格的な水の清浄化の取り組みが始まった。以後、眼に見えた効果は貧血の改善度の向上であり、ESA製剤使用量の減少と同時にβ₂-MG値の減少も感じられるようになった。

当院では1998年から本格的な水清浄化への取り組みを始め、2003年からon line HDFを開始している(ETフリー透析液)。PS膜等の高性能膜はすでに1995年から使用していたが、清浄化とともにβ₂-MGの経年的低下が2001年から2006年まで顕著にみられた(図1)。しかし、それ以降は逆に上昇傾向をみるという意外な結果を得ている。これは調査の結果、唯一、高齢化の推移と一致し、かつ、この間での年齢とβ₂-MGとの間には有意な相関が認められるという大変興味深い結果を得た。今後の解明に期待したいところである。

高知高須病院(高知)